



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(四) 中村正直との出会い

中村正直との出会い

こうして関信三は、諜者安藤劉太郎としておよそ二年を横浜に過ごし、諜報活動に専念した。そしてこの横浜時代に、のちに東京女子師範学校摂理（校長）として彼の上司となる中村正直に出会って

いる。「出会い」とはいっても、それは一方が探る者として、他方が探られる者としての、きわめて変則的で一方的な関係だった。その関わりの中で、ふたりが直接顔を会わせたことがあったかどうかは大変興味のあるところだが、可能性は十分あるにしても、い

ま断言することはできない。けれども、関信三が中村正直を知ったのが諜報活動の過程であったということは、のちに彼が幼稚園創設の事業に関わることになった時、彼の幼稚園理解の枠組みに何らかの影響を及ぼさずにはおかなかったであろう。幼稚園の始まり譚として、両者の奇妙な出会いについて取りあげることは意味があろう。

中村正直（敬字）は若くして幕府の聖堂の儒者になった漢学者で、蘭学、英学にも通じる当代の大学者であった。慶応二年十月、幕府の英国留学生の取締りとして英国におもむき、一年有余の海外生活を送ったが、幕府崩壊のため四年六月に帰国。静岡に下った徳川家達に従って、静岡の学問所の教授になった。彼はここでスマイルスの『西国立志編』やミルの『自由の理』を翻訳し、出版する。『西国立志編』は大ベストセラーとなり、彼の名は一般にも広く知られるようになる。明治五年六月、政府に招

かれて大蔵省翻訳御用掛となった。明治六年に彼が小石川に起こした同人社は、当時福沢諭吉の慶応義塾と並び称されており、東京女子師範学校が開設される以前にすでに女子の入学を許すなど、先進的な試みをしていた。森有礼、福沢諭吉などと明六社を起こしたり、東京女子師範学校、東京大学などに奉職、盲学校の設立にも関わった。

当時安藤劉太郎と名乗っていた関信三は、この著名人とキリスト教探索の過程で遭遇したのである。彼が探索していたのは、中村正直の静岡時代から上京するあたりの時期である。

出会いの舞台

ふたりの出会いの舞台は、横浜の居留地内に開設されたアメリカン・ミッションホーム（亜米利加婦人教授所）と呼ばれる子どものための教育施設であった。

安藤劉太郎が諜者として横浜に着任してから半年

ほどたった明治四年五月、三人のアメリカ人婦人宣教師、プライン (Mary Prayn)、ピアソン (Louis Pierson)、クロスビー (Julian Crosby) が横浜港に到着した。彼女たちを日本に派遣したのは、外国の女性たちをキリスト教によって教化教育することを目的に設立された「米国婦人一致外国伝道協会」という超教派の組織であった。宣教師バラが一時帰国した際、横浜における混血児の教育の必要性を訴えたため、それに応えて三人が派遣されてきたのである。来日後まもなく彼女たちが開設したのが、横浜共立学園の前身であるアメリカン・ミッシオンホームであった。ここに安藤劉太郎と中村正直がそれぞれ関わりを持つことになる。

彼女たちが来日した当時、安藤劉太郎はバラの英語学校の生徒だった。彼は、次項にあげるような事情から彼女たちの動向を来日直後から監視していたと思われるが、諜者報告書を見ると、安藤劉太郎と婦人宣教師たちのあいだには具体的な交流があった

ことがわかる。安藤劉太郎はアメリカン・ミッシオンホームで行われていた夜の祈祷会に出席していたし、バラとピアソンが敢行した房州への伝道旅行に安藤劉太郎が同行した、という驚くべき記事も諜者報告書に見ることができる。

一方、当時静岡学問所の教授であった中村正直は、明治四年秋、同学問所の教授として招へいしたアメリカ人教師を迎えに、アメリカン・ミッシオンホームをはじめて訪れた。海外生活を体験していた中村正直は、ミッシオンホームに違和感を持たないどころか、かえって大変好印象を抱いたようである。当時ミッシオンホームにはわずかな生徒しかいなかった。混血児の問題は想像したほど深刻ではなかったことと、女子教育自体なじみがなく、西洋婦人が経営する学校ということで恐れられて、日本人の入学者もいなかった。そのような状況を知った中村正直が、みずからミッシオンホームのために生徒募集広告文を書いたという。

婦人宣教師たちがアメリカン・ミッションホームを開き、中村正直が明治四年十月にその生徒募集広告を書いたことについては、幼稚園の歴史の前史時代の出来事としてすでに報告されている。ここでは、のちに「初代園長関信三」となる安藤劉太郎が、幼稚園創設の立役者のひとりとされる中村正直とどのように出会い、また、アメリカン・ミッションホームとどのように関わっていたのかという、これまで取りあげられなかった面にしばって考えたいと思う。

学校設立用地貸与願

さて、アメリカン・ミッションホームと譯者の間には、思わぬところに接点があった。明治四年の『日本外交文書』のなかに、「横浜ニテ米国婦人出願ノ小学校設立用地貸与ニ関スル件」としてまとめられている一連の文書がある。記録は、四年六月二三日、外務省で行われた澤外務卿と米国公使デロン

グとの会談から始まっている。

デロング 我国婦人ブラインと申す者、この度横浜に学校設立のため山手英国兵隊屯所跡地を拝借したく、神奈川県井関長官に米国領事を通して願いを出したところ、領事に對し、公使からその旨外務省に申し出てからでなければ許可できないとの返事がありました。ついで外務省から神奈川県に借地許可の通達をお出し戴きたくお願いに参りました。

澤 地所の件は井関が承知していれば貸し渡しには何の問題もありません。ご趣旨は神奈川県に急ぎ伝え、委細取調べの上ご報告申し上げます。

デロング 地所は商家や遊技場等ではなく、学校設



立のためのものでありますから、地租等についてご配慮下さい。

澤 何を教える学校ですか。

デロング 横浜には小児を教える学校がないので、
プラインは小学校を設立する目的であります
が、実のところは日本国婦人が産んだ西洋人の
子どもを教育致すつもりであるとのこと
日本人でも子どもであれば教育ということ
であります。

以上が当日の会談内容である。早速同日、外務省
から神奈川県あてに事情照会がなされた。「学校建
設のことであるのに、なぜ外務省の許可がなければ
ならないと言ったのか。なにか差し障りでもあるの
か、早々取調べの上ご返事ありまし」。二九日に神
奈川県から外務省に回答があった。「彼等の教訓と
は耶穌の教えであつて、ただ今懸念されているもの
であり、当県だけで済ませられる問題ではございま
せん。今回ここで許可すれば各開港地でも認めなけ

ればならなくなり、不都合も起こりましょう。それ
ゆえ始めが肝心なので御評議の上可否をお決めいた
だきたく、ご報告した次第であります」

この件は十一月になつて、外務大輔寺嶋宗則、外
務卿副島種臣連名で「米利堅合衆国特派全権公使
チャーレス、イ、デロング閣下」あての「米国婦人
出願ノ小学校設立用地等貸与ニ関シテハ支障ナキ旨
回答ノ件」と題する文書で幕となる。プラインの学
校設立のための借地願いは、結局、「貴国政府御所
用の儀と相察候」という変則的な形で許可されたの
であつた。

この間にやり取りされた文書によれば、政府は混
血児の問題を決して軽く見ていたわけではないが、
頭を痛めていたのは、教育の問題とというより、日
本政府にどこまで責任があるのかということと、キ
リスト教をどうするかであつたように思われる。と
りわけキリスト教の問題には苦慮していた。そのた
め、借地には何の問題もないと言いながら、許可ま

でに五か月を要したのである。外務省と神奈川県で取り交わされた文書に貼付された「貼紙」には、「婦人の小児に教ゆるは格別行届趣也、神奈川にても注意して其学規を窺置へし」とある。彼らが何を教えているかよく注意せよと、キリスト教に警戒していたことがわかる。

この時貸借許可が下りたのは山手一七八番であったが、「貴国政府御所用の儀と相察候」という文言もあって、すんなりとプラインたちが取得することはできなかった。彼女たちは代わりに山手二二二番を入手し、明治五年十月に移転した。問題の一七八番には、明治八年六月、キダールのフェリス・セミナーが校舎を構えることになる。

いずれにしても、この件が外交問題の一端に上っていたことは間違いなく、当然諜者の監視するところとなった。婦人宣教師たちは借地許可がなかなか下りないために、申請から二か月後に、横浜山手四八番館でミッシヨンホームを暫定的に開設した。山

手四八番館はバラの私邸であった。彼女たちの来日はバラの呼びかけに応えてのものであったため、バラは彼女たちに自宅を提供せざるを得なかったのであらう。五年十月に二二二番に移転するまで、彼女たちはバラの館で、アメリカン・ミッシヨンホームを運営した。そして、やがて同所で開かれるようになる夜の折祷会に、安藤劉太郎は公然と通い始めることになった。

明治四年末に安藤劉太郎の配下に入ったある諜者は、横浜着任後すぐに、「小生はピヤールに入門仕居候」と書いている。ピヤールとはピアソンのことである。アメリカン・ミッシヨンホームは生徒数が少なかったため、英学を希望する男子に、ピアソンが担当して午前中英語と聖書を教えていた。それまでは安藤劉太郎がバラの門下生としてミッシヨンホームに出入りしていたが、より詳しく調査する必要があったのだろう。そこであらたに長崎から破邪僧が呼び寄せられ、諜者として送り込まれた。「ピ

ヤルソン(ピアノン) 学校聖教生盛ナリ、ピヤルソン学校ノ夜会日曜日一周ニ二夜ツ、ナリ、二月三十日ノ夜会杯アマリノ群眾ニテ書生ノ帽子洋傘等種々品物紛失スルホトノ盛況ナリ」。これでは課者を送り込まないわけにもいかないであろう。ミッシヨンホームは、日本人学生の熱気あふれる場所となつていったのである。

クラークの雇用契約条項

中村正直がミッシヨンホームを訪れて生徒募集広告を書いていた時、同所を舞台に、キリスト教にまつわるもうひとつの外交問題が同時進行していた。そもそも中村正直がアメリカン・ミッシヨンホームを訪れたのは、同所に滞在していたクラーク(Edward Warren Clark)を静岡に迎えるためであった。クラークは静岡学問所で物理と化学を教えることになつていた。ところが彼の静岡御雇いに関して問題が生じたのである。雇用契約書にキリスト教の

宣教を禁ずる一条があつたからである。

飯田宏「E・W・クラーク著『日本に於ける生活と体験』(「静岡女子短期大学紀要」二号)によれば、クラークは熟慮の末、その一条を撤回しなければ契約を承認できない旨を政府に申し送つた。中村正直はその調整のため、同所に滞在を余儀なくされたのである。彼がアメリカン・ミッシヨンホームの生徒募集案内を書いたのも、「当所ニテハ、ピヤルソン門人ノ由ナリ」と課者に報告されるほどピアノンと親しくなるのも、その時のことである。

結局、勝海舟と岩倉具視の尽力によつて契約書からその一条が除かれることになり、クラークの静岡着任が決まつたが、中村正直滞在中に、アメリカン・ミッシヨンホームを舞台に、キリスト教宣教を黙認するか否かの綱引きが行われていたわけである。クラークはこの戦いに勝利し、中村正直と共に静岡におもむく。そして着任後ただちに、元將軍家のお膝元静岡において、宣教を始めるのである。政

権首脳部の黙許あつてのことであつた。

年が明けて五年二月、中村正直は妻や娘を入学させるために再びミツシヨンホームを訪れた。安藤劉太郎は、人知れず日本のキリスト教政策が二度までも押し切られたこの場所を、特別な思いで注目せずにはおられなかつたであろう。そして外国人に牛耳られたこの場所で、かの異教徒たちに協力し、宣伝文を書くどころか、率先して家族までも入学させたこの輩を、彼がいかに苦々しく思ったことか、想像にあまりある。

「擬泰西人上書」

さらに安藤劉太郎は、受洗の直後に、中村正直に関する驚天動地の情報を手に入れていた。明治四年末に、「擬泰西人上書」と題する一文が匿名で発表された。匿名の西洋人が天皇に上奏する形で書かれたもので、「日本は西洋文明を盛んに輸入しているが、その根本たるキリスト教を採用していない。こ

れは枝葉に走つて根本を忘れたものである。よろしくその根本を採用し、まず天皇自身が受洗して模範を示すべきである」というセンセーショナルな内容であつた。

キリスト教禁制下での信じられないような思い切つた文章である。小澤三郎『日本プロテスタント史研究』によれば、宣教師ブラウンがこれを翻訳して本国に送るなどし、政府のキリスト教政策にも影響を与えたといわれている。明治五年八月、『新聞雑誌』第五六号付録に転載されて、多くの人々の目にふれるところとなつた。反論文が掲載され、さらにまたその反論が出るなど論議の的となつて、人々の間では一体誰が書いたのかと、その後長いあいだ



詮索され続けたという。

ところが譯者報告書を見ると、すでに早い時期に、「擬泰西人上書」の著者は中村正直であると明らかにされていくことがわかる。「右学校ハ教授師中村敬三管轄致シ居候処、同人ハ三日奉呈置候外臣某之建白ヲ認候ニ而、余程彼教之為メ尽力致シ候由ニ御座候」(五年二月二三日付)。静岡の洋学校でキリスト教が蔓延しているものになっている中村敬三(正直)は、先日三日にお届けした「外臣某之建白」すなわち「擬泰西人上書」を書いた者で、よほどキリスト教のために尽力している様子である……。この報告書を書いたのが、ほかならぬ安藤劉太郎であった。「擬泰西人上書」を上司に差し出した二月三日というのは、安藤劉太郎が洗礼を受けた翌日である。受洗直後に文書を宣教師からもらい受け、早速上司に届けたのであろう。それから何日もしないうちに、彼はその著者が中村正直であることも打ち明けられたのである。洗礼を受けて教会の内

部に潜入しただけの成果はあったということだろう。けれども、苦勞のすえに入手した一級の情報も、なんら政府を動かすことはできなかった。当局は、この事実をきわめて早い時期に知りながら、その情報を握りつぶすほかなかったのである。

中村正直が「擬泰西人上書」を書いたのは、クラークを静岡に迎えてまもなくのことであった。安藤劉太郎の報告書に次のようにある。「静岡県内洋学校義者昨年来亜国教師クラーク在留ニテ公然学校内ニ於テ生徒ニバイブルヲ伝習致シ候処、近来ハ幾多之信教徒モ出来致シ、洋教日ニ蔓延之条伝承仕候」。キリスト教宣教を黙許されたクラークが公然と学校内で生徒に聖書を教え、静岡県内にキリスト教が蔓延してしまったのも、中村正直が目を見やうな「擬泰西人上書」を書いたのも、あのミッシェンホームでの力の対決に日本が負けてしまったためである、と安藤劉太郎は事態の推移を見ていただけに臍を噛む思いだったのではないだろうか。外国と

の交際上やむなしとはいえ、断固とした決定がなければ取り返しがつかないことになる。中村正直と、静岡でのキリスト教の隆盛と、ミッションホームのにぎわいは、彼にとってその怖るべき雛形にほかならなかった。

幼稚園の歴史を考える上で、関信三がこのような事情のもとに中村正直を知っていたことは覚えておいてよいだろう。関信三はキリスト教探索の過程で中村正直に出会った。数年を経て、若き日の夢むなしく破れ、僧侶としての生き方を捨て、挫折の末に再起した彼は、過去を秘して東京女子師範学校に奉職する。そして、そこで、かつて敵の巨魁と目していた中村正直に再会する。彼が受けた衝撃を思うと、痛ましさに言葉を失う。しかし、その時の驚愕は、やがて幼稚園という未踏の世界に、彼の残りの生涯をかけようという決意へと変わっていく。

ほかの誰でもない、関信三がフレーベルの幼稚園

の紹介者であったということが、日本の幼稚園にとって特別な意味を持っている。諜者として生きて過去のすべてが、彼の幼稚園紹介の原点にあると私は思う。

また付け加えれば、彼が当時日本では一般的でなかった婦女子の教育について多少とも見知ったことが、同じく諜報活動の過程においてであったことも注目する必要があると思う。彼は婦女子の教育というものを、国と国との力の対決の場において、国力の差を背景に体験せざるを得なかった。そのこともまた、のちに彼の幼稚園論を考える時に意味を持つてくるであろう。彼の幼稚園紹介については、本連載の後半で取り上げるつもりである。

今回は、安藤劉太郎がついに洗礼を受け、「関信三」となって洋行するまでを書いてみたい。